

9 おうとう
地域慣行基準
【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	1 2	

(1) 特徴及び吸収特性

おうとうは極めて酸素要求度の高い樹種であり、**通気性と排水性のよい土壤が適**している。標準的な施肥法従って、地下水水位の高い土壤は不適であり、水田転換園では特に排水対策を十分に行う。

若木時代に樹を早く大きくし、収量を上げようとして多肥栽培をするのは避ける。特に窒素が多いと、樹が軟弱に育ち、凍害を受けて枯死したり、胴枯病を助長したりする。

(2) 標準的な施肥法

基肥の施肥時期は11月～3月とし、有機質肥料の場合は早めに施用する。窒素は**年間施肥量の80%**、リン酸、カリは全量を施肥する。なお、**砂質土壤や積雪の多い地域**など肥料の流亡が懸念される場合は、**11月と3月に基肥の肥料を分施**する。80%を11月に、20%を3月に施用する。すなわち基肥窒素量の80%を11月に、20%を3月に施用する。

年間窒素施肥量の20%は礼肥とし、収穫後に速効性の窒素肥料を樹勢をみながら施用する。特に樹が衰弱している場合は、収穫後直ちに施用する。

おうとうの優良園では、地力窒素が豊富なことが知られている。地力窒素の維持増進のためには有機物の補給が大切である。バーク堆肥や稲わらなどC/N比が比較的高い有機物を、毎年1 t/10a程度投入する。